

律令時代に於ける

郷の分割について

佐藤

仁

(一)

古代律令政治に於ける地方区割は、原則として
 国、郡、郷へ里^①の授階に区分され、整然たる規
 制を有しているが、就中、郷へ里^②については一
 郷へ里^③五十戸と云う数字により規定され、戸数
 の増大は分割問題を生ずる結果となり、令義解^④
 令集解^⑤に於てもその分割法が多く論ぜられてい
 る。奈良く平安前期諸資料中に散見する「余戸解^⑥
 はかゝる分割の結果生じて来たもので、「駅家^⑦
 「神戸^⑧」等と共に古代律令別村落に於ける特殊郷
 とされている。

さて余戸に対する研究は比較的古くより始めら
 れて居り、江戸時代「俚言集覽」が「あまべ」の

項目に於いてこの問題を取りあげ、他に林述齊^⑨、
 伴信友^⑩等が問題としている。これ等の論説を通説
 するに、「俚言集覽」は余戸^⑪磯多村なりと解し
 、後二香は令義解、令集解より解釈を進め、分割
 により生じた五十戸未満の郷をさすものと述べて
 居る。以上二系統の論述は、明治以後にも引き続
 き、小林庄次郎氏^⑫はその香「余戸考」に於て前者
 の立場を取り、最近では坂橋源氏^⑬も同じ立場に立
 って居られる。これに対し、井上通泰博士始め、
 最近における曾我部靜雄博士等は後者を取り、ほ
 ゝ学界の定説と成っている。

しかしこれら余戸関係の諸研究においては今日
 迄戸数、成立法、住民の特異性等にのみ研究の主

方がおかれ、かつ後者の立場で余戸を論ずる際には、全国的分佈問題は考察せられず、分佈地の偏在より余戸特異郷説の裏付けとして利用されるに止まり無視せられて来た。又、余戸のみに注目し余戸以外、律令社会には分割法が存しなかつたと云うが如き見解すら見られた。

私は此際余戸をもつて、令剛五十戸一郷へ里の郷内戸数増加により分割せられ五十戸未満の特異郷なりと解し、かゝる立場より、

(1) 余戸の全国的分佈状態、及び和名抄余戸郷の分佈上の意義、

(2) 郷の分割法の変化及びその過程の二向題につき論を進め、余戸郷の性格を考察すること、したい。

(註)

(1) 聖武元年以前は四郷三里の三段階、以後は四郷三里の四段階天平十一年より後は四郷三里の三段階に変化、又四の他に義郷等の特殊地帯が存する。

(2) 戸令為里條

凡戸以五十戸為里(下略)
 ① 義郷、義解、戸令為里條
 ② 律言集覽「あまべし條」

義多村をアマバと云、餘戸の義也と云り。「(優名抄)」に諸国の郷名に餘戸と云へる者幾所もあり、此は歸化の者を置しところの名也、異国人は多く屠垂に習はる故に屠を業とせる也、今義多村と云うもこの稱の過れる也といえり。

③ 新編武藏風土記

餘戸は郷名にあらず、令式によるに一郷を建るには亦戸数足らざると云其割余を別して余戸と云うなり。或曰、あまりべと訓ずべし、下略

④ 若狭旧垂考(伴偏反全集)

余戸郷今絶て考べき由なし。張の故は戸令に、凡五十戸為里、義解に若狭六十戸者割十戸立一里置長一入、其不滿十家者兼入大村不煩置とある。

令によりて割られる里を餘戸里と云

うへ下略

(7)「餘戸考」(養老の起源)

(8)「和名類聚抄奥出羽余戸考」(岩手史学 研究十三)

(9)「唐風凡士記新考越部條」

(二)

先か系図く平安前期に於ける諸資料中より余戸に關するものを求める、それらはおおよそ

(1)具体的資料

余戸の存する地名を示す資料、即ち某國某郡余

戸里(郷)の如き記載法のもの。

(2)概念的資料

余戸自体の性格、意義を示す資料。

に二大別し得よう。今、後者についてはこれを論

外におき、こゝでは具体的資料を列挙し、後論の

資料としてい。

(1)河内國丹波郡余戸郷

「西麻寺文永筆記」所収天平十五午帳には同寺

の僧についての記載がみられ、その内、同年以前に死亡、行方不明等事故のあった僧に対しては本貫、戸主との親柄、年令、高、受式受戒月日などが各々詳細に記載されている。しかしてこゝに見える本貫は天平十五年現在のものでなく、各僧の出家の際の戸籍より転写せられたものと推定される。標記の余戸郷は曾留藏の本貫で受式受戒年月日は、養老六年三月二十三日とあり、その当時存したものと考へられる。

(2)伯耆國御児郡餘戸里

伯耆國凡士記述文中に見られ、その存在年代については、資料不足の爲明確に断定は不能であるが、「里」の使用より郡制施行以前すなわち天平十一年以前であるとの推定がゆるされるのではないかと。

(3)山背國愛宕郡餘戸郷

神龜三年「山背國愛宕郡雲下里計帳」に見える本資料中には単に餘戸郷と見えるのみで何郡のものか判定し得ないが、全資料中にみえる他郡の郷の記載例を見るに、それは皆郡名を記している

この案から多少分愛宕郡内に存したのではないかと
考へられる。

④播磨国賀部郡餘部

住吉大社神代記に見える、餘部郡の「ヤレ」の脱
字なること、及び同余部が風土記にない案より風
土記成立以後本書の完成せる天平三年以前に成立
したと云う二案を田中卓次は研究主張してあられ
るがこれを平当とする。

⑤河内国石川郡餘部

山代伊美吉勸籍へ正倉院丹波古文書⁽⁶⁾、天平五

年順に存在した。

⑥出雲国意宇、鷺根、楯鏡、神門郡餘部里

出雲風土記所収の里で、全書末尾日付より天平
五年順存したことが知られ、又意宇郡余部條の記
載により、神龜四年設置せられたことがわかる。

⑦但馬国気多郡餘部郡

正倉院文書「私部得麻呂漆工貢進文」に見られ
、時代は天平宝字六年。

⑧越前国坂井郡余部

「越前国司解」に見える、天平神護二年十月二

十一日付。

以上は奈良時代残存資料より採録せるものにし
て、総数十一。更に平安時代に入ると

①河内国錦部郡餘部

元慶七年九月「河内国錦部郡餘部」手録起貢成帳⁽⁷⁾に見え
、当時の存在が知られる。

②山城国宇治郡餘部

「安洋寺加藍縁資起成帳⁽⁸⁾」に見え、貞觀十三年
八月の状況。

③讃岐国山田郡餘部

元慶四年三月二十六日付太政官符⁽⁹⁾に見られる本官
符に於ては全郡の郷数を十郷餘部と記載余部の存
することが知り得る。

④丹波国加佐郡余部郡

承平二年「丹波国誌」に見える。

以上四例、平安時代資料として挙げたが、この
他、平安中期に成立し、余部研究に欠くべからざる
資料として和名類聚抄があるが、これについて
は以下章を改め述べることにし、本項での論述をさ
げたい。

上述の余戸は地名として明白に記載せられ居るものゝみであるが、これら以外にも余戸の存在の推測に資すべき材料が二、三ある。それらを列挙すると、

先づ養老二年常陸国菊田郡設置の際、二一〇畑を以て郡をたて、居ることが見え、これを里数に換算すると菊田余戸となり、和名抄録名と一致する。古くより本郡に余戸が存したのではなからうか。

次に日本書記を田天皇屯倉記^中、通戸屯倉が存するが、これに対し古くより「アマルヘ」と詠まれて居り、今日に於ても通戸^ル余戸の意に解せられてゐる。しかしこれをもって余戸の存在を認めるには多少問題が存する。又たとへ余戸なりとしても、それは書記成立以前に存したものでなく書記成立当時の概念で記されたものであろう。

又こゝで問題となるのは播磨国祇部里である。古くは井上博士⁽¹⁾最近では官本⁽²⁾氏が研究、全里の特殊性を論じておられる。特に井上博士は祇部をコシヤル⁽³⁾アマルヤと解され、余戸なりと推定され

一方官本氏は凡土記に祇部里が三十戸を論じたとの記載は心くとも令制により五十戸を以て一里を論じた當時に於ては原則的のものであり、令凡土記に於て祇部と令凡土に設置され凡土川里、小宅里等については戸数の記載のない案から此里が特別に事情下にあつたと考へられる旨述べておられる。これに対し私は祇部里が単にコシヤルと発音が似ているため、井上説の成立となつたものと考へる。令凡土記に於ては余戸等、令制についての説明記事は皆無で、しかも令制には地名説⁽⁴⁾するのせられてゐる。これらの案から祇部の名が余戸以外の理由によりつけられたことが知られる。又後述の如く、私はこの時代、即ち持統天皇四年頃⁽⁵⁾にはまだ余戸が存しなかつたのではないかと考へるものである。祇部と余戸は一応別問題なりと解する。

以上余戸資料を列挙、それらにつき考察を述べて来ましたが全体を通じて見る際、資料のほとんどが養老以後の存在を示し、それを逆るものはない。又地域的にその分析をみると、年代に若干の差こ

それ、それは河内山背、伯耆、出雲、恒馬、丹波、播磨、讃岐常陸等数こそ少いが当代の資料の存する地方には広く分布して居ることが知られる。前掲資料の如く、奈良中期頃には他地方に於ても出雲同様、余戸が多く設置せられ、全国的に存したと考えられる

(註)

(1) 続群書類従オニと輯下所収「西琳寺文永記」僧賢等事條

(2) 僧智威河内四北郡余戸郷、余戸主依綱(同)古治郡常陸郡是六年三月廿日衆卿寺史公衆

(3) 岸俊天著 古代後期の社会意識(新日本史講座所収)

(4) 大日本古文書一、三六一頁

(5) 田中卓著「住吉大社神代記」所收論文

(6) 大日本古文書三五、六四頁

(7) 日本古典全集出雲風土記

(8) 意宇郡余戸條

版神龜四丘編戸、天平里 故云餘戸
他郡且加之

(9) 大日本古文書十六、五八頁

(10) 大日本古文書 五、六〇一頁

(11) 平安遺文 オ一七四号文書

(12) 全書 オ一六四号文書

(13) 類聚三代格 卷七 郡司事 所收

(14) 平安遺文 オ二四。号文書

(15) 続日本紀 養老二五年五月二日

へ前畧、訓常陸國多河郡之郷二百一十烟曰、多河郡、属石城國焉

(16) 知名抄廿卷本國郡部

多河郡 酒井 河邊 山田 大野

餘戸

(17) 日本書記安閑天皇元年四月十二月條

へ前畧、根吉嶺以寸幡媛獻系女丁、并、新安藝國過戸處城部之倉入下畧

(18) 播磨風土記新篇 攝保郡越部里條

(19) 「里制」の成立について(日本史五十八)

(20) 宮本氏は本里を余戸として居られぬ

(21) 播磨風土記攝保郡越部里條

越部里(舊名皇子代里士中々)所以

號皇子代者、同宮天皇之世、寵人但馬君

小澤家、家傳、性翁皇子代書、而迄二宅於

此村令、奉仕之、故曰皇子代村、後至、上野

大夫結、廿戸之野、改號越部里（一云自

祖馬國三宅、越系、故號越部村）

22 越部里條にみえる上野大夫と小川里に更え
る上大夫を同一人物とみると、小川里條に庚
寅年の文字が見える處から越部の成立年代
がわかる、これが持統四年である。

(三)

さて前項で除外した和名類聚抄國郡部所載の余
戸につき考察の結果、以下二項に分ち述べる事とす
る。
和名抄には周知の如く十卷本、二十卷本と卷数
内容上に差異のある二系統が存する。しかして本
項以降に於て問題となる余戸資料は、國郡部を有
する二十卷本に限られるが、更に二十卷本は流布
本、高山寺本等があり、高山寺本に於ては次の如
き記載と共に

へ前略、以不入班田謂之余戸異名同

縣簡載

縣名中より余戸郷を除いてゐる。山本信武氏の研
究によれば高山寺本の成立は平安末であり、今代
の載に従うならば、平安末にはかゝる見解のもと
に余戸が除外され、転写せられたと解し得る。か
くして見ると余戸の資料とかり得るものは流布本
のみである。流布本國郡部には九十六箇所による
餘戸郷及び餘戸と解し得る郷五、計百一箇所の余
戸がみられる。而らば、此等の余戸は何時の状態
を示すものであろうか。古くより國郡部の底本の
成立は和名抄成立年代より進ると云はれて居る。⁽³⁾
最近では池田弥太郎の研究があり、氏によれば、そ
の時期を九世紀半、弘仁頃と考えて居られる。私
見によれば、曰項に列挙せる資料中、平安期の資
料が、それ以前のものに比し和名抄と一致する案
の多いこと、而してそれらが弘仁以後の資料たる
こと（もっとも弘仁以前に設置されに可能性があ
るが）、部の配置状況が他資料と一致すること、
新設の國、郡等は成立年代の記述の存すること等
より、死年代に作られた底本を利用し更に補訂が

明乏られしものと思はれる。又その修正の際、大宰府管内の資料が存せぬ為、西海道に關して不備は異が王じしものと考へにい。

和名抄記事は一応平安中期頃の状況を示すと考へられるが、こゝで前掲奈良、平安前期資料にみえる余戸と、和名抄のそれとの関連を少しく述べることにする。前掲資料中奈良時代に属する(4)(5)の余戸はいかなる運命をたどつたであらうか、箇別にもその消息をたづねてみると、

(4)河内国丹北郡余戸は養老六年頃をみせ、後否、和名抄には存在してゐらぬ。

(4)伯耆国相見郡余戸は多分和名抄に於ける天萬郷に変化したものであらう。

(4)山背国愛宕郡余戸は和名抄に存続してゐらず、いつの時代かに変化をみしものである。

(4)播磨国賀根郡余戸は和名抄に於てもその姿を残してゐり、(4)と共に生命の長いもの、一つとして数へられよう。

(4)河内国石川郡余戸も天平時代初期に存してゐるが、和名抄には載いてゐらぬ。

(4)出雲国田原郡の余戸も和名抄には姿をみせてゐるが、早い時代に変化があつたものと考へられ、就中神門郡余戸については天平十一年出雲国大祝願給正名帳により、その変化を知ることが出来る。即ち同帳には余戸の記載がなく、これが伊豫郡に相当するものと考へられる。おそらく天平二年前後の造籍の際改名せられたものであらう。

(4)但馬国氣多郡余戸も和名抄にはなく、一方

(4)越中国坂井郡余戸は和名抄に二〇〇年にわたる生命を保つてゐる。

以上奈良時代の余戸は、和名抄時代迄余戸として存続し、比叡約早い時代に改名、その他変化のあつた例として(4)(4)(4)(4)の大例九余戸となつてゐる。

これに對し平安初期資料の余戸は、(4)の讃岐國山田郡余戸を除き、全部和名抄と合致する。即ち(4)の三例が和名抄に残存する。

而時代の資料を見るに奈良時代の余戸は和名抄並に大郡分券を消すに對し平安期のそれは和名抄並に残存する。年代的に差異が少い爲當然とも云えようが、これ等の差異は、余戸が短期間しか存続しなかつたことを示す材料となり得るのさながらうか。又和名抄和名中には奈良時代の余戸の配列したものを当然含むと考えられよう。

〔説〕

(1) 高山寺本居倭名類聚抄について(文庫雜誌第15号)

(2) 餘戸解し得るもの

神錄 (安房國) 一 神戸余戸であらう

全戸 (同前) 紀伊、阿波、四 余と全の書と誤り

(3) 本居宣長説「奈良時代を取る」

(4) 本項末尾で詳述

(5) 丹北郡 依羅 黒山 野中 上 三宅 今田 臣 吉生 山下 上 狹山 の十二郡

(6) 廣名郡 望理 長田 住吉 餘戸

(7) 石川郡 佐備 船口 難尾 大國

(8) 意岸郡 寛道 赤崎 拜志 神戸 忌部 山代 大草 筑陽

嶋根郡 朝山 山口 十津 美保 方結 賀知 多久 生馬 彦吉 駒

猪熊郡 佐香 猪熊 玖澤 沼田

神門郡 朝山 日置 盛名 高岸 南原 多岐 伊勢 熊野 吉志 湯城 八野

(9) 大日本古文書 二、二〇一頁

(10) 出雲國大稅賑給屋名帳 残簡の郷名配置を見る

と出雲郡の赤治、河内出雲村東の各郷の人数

次いで神門郡惣計朝山日置清瀬津伊勢の各郷

、狹路多伎面取、神戸の順となつてゐるこの

配列については石母田正臣の研究(天平十一

年出雲國大稅賑給戸名帳について)研八の文所

収へにより日置の後に吉志、狹路の後に多伎

郷の存存が認められ結局神門郡の配列は

朝山、日置、吉志、清瀬、多伎、津、狹路、総、多伎、面取

神戸

の順となりそれは同國風土記の

朝山、日置、塩治、八野、高岸、吉志、清瀬、多伎、餘戸

狹路、総、多伎、面取、神戸

とほぼ一致し、又年代的に差があるが和名抄

とも類似点がある。この他全帳にも日置、清

瀬前に更に脱着がありこの点を考慮に入れろ

と風土記の配列との一致が予想される、かく

考へて来ると配列上から風土記の餘戸と戸名

帳の伊秩郷が同上ではないかとの予想が浮び
上るが、更に才二の証として伊秩郷の賑給
者数がわずかに十五人で、神戸、駄敷等と全数
であり他の郷に比しわずかに三程度である。

一般に高年者の人数は人口に比例すると考え
られるからこの数字は伊秩郷の人口の小なる
ことを示すと考えられる、このことは、伊秩
小近年真郷に昇格したばかりである為と考え
られる、以上二案より天平五年出雲風土記完
成後天平十一年賑給戸名帳時代迄に余戸が伊
秩と改名したと推定する。

(11) 賀多郡 大原、坂本、口沼、勝見、大坂、日置、勝部
(12) 坂井郡 栗田、荒泊、高向、磯部、長畝
高屋、呼江、福留、海部、川口

堀江 餘戸

(13) 山田郡 殖田、池田、坂本、蘇甲、三谷、拜

師、田中、本山、高松、塩所、善田

(14) 錦部郡 餘戸、百濟

宇治郡 宇治、大田、賀美、阿屋、餘戸

小野、山科、小東

八加佐郡 志保、高橋、大内、田造、餘戸

尺瀬、志託、肩道、川守、神戸

(四)

奈良、平安初期所時代に、余戸は前述の如き消
長を經、ついに和名抄に百一箇所にわたりその姿
を残すに至る。この百余の余戸を分析的に研究す
るに表一の様になり、表を見るに余戸の分析は二
大ブロックに分けることが出来る。即ち餘内及び
その周辺諸國、及び東國がそれであり、この東國
は奈良時代に比し全口的な分布から部分的な分布
へと收縮が見られる。前代山陰地方に分布してい
た余戸がほとんど消滅したことは最も好例と云え
よう。

所でかくの如き二大ブロック説に対し、強い反
説が出るのが想定し得る。即ち和名抄の余戸の
数に信を置かぬ説がそれであり、余戸が郷の戸数
増加により生ずるとすれば、より多くの余戸が残
存せねばならぬとの主張がそれである。しかし私
は一応次の如き理由から和名抄に記載されている

表 I 和名抄時殊郷一覽表

道	国名	戸	余戸	神戸	町家	上下分割郷	道	国名	戸	余戸	神戸	町家	上下分割郷
畿内	山背	2				(高野)上下林(安高)上下要	山陰	丹波	4		1		(久米)上下神
	大和	1				(安高)上下林(高上)上下要		丹波	1		3		
	河内	3				(丹波)丹上下		但馬	2		1		
	和泉	5				(和泉)上下林		因幡			1		
	摂津			1	2	(豊島)上下		出雲			2		
						(高野)上下林		石見					
東	伊賀			1	5	(飯高)上下林	山陽	播磨	4		3		(三次)上下次
	伊勢	1		5	5			美作			1		
	志摩	1		2	2			備前			3		
	尾張	2		3	2			備中			3		
	参河				3		陽	備後			3		
	江				5			安芸	2 (全)		1	4	
	藏河				1			周防			3	5	
	伊豆				1		南	長門					
	甲斐	1			4	(福福)上下系		紀伊		8	1		
	相模	3			4		海	淡路					
	武蔵	1	神	1	1			阿波	1		5	1	
	安房	1			1		讃岐						
	上総	1			1			伊豫					
	下総	5			1	(渡路)上下島		土佐					
東	出江	2		2	4	(坂田)上下坂							
	美濃	1			7	(東豊)上下(伏野)上下林							
	飛騨	2		2									
	信濃												
	上野	3			4	(甘栗)上下端							
	下野	18			8	(塩屋)上下山							
	陸奥	6											
北	若狭	2											
	越前	1											
	能登	2		2		(能登)上下日						(用は郡区示す)	
	加賀				1	(能登)山上下							
	越中	1											
	後援	1											
陸	佐渡												
計		96	5	56	28								

(用は郡表示)

余戸の数及び分府地域に區を置きたい。オ一に和名形の原本が民部省所管の資料にもとずいたものであろうこと。郷数は政府の施政資料として重要であり、常に正確を要求せられ、又それに対し努力がはらわれたであろうし、地方に於ても行政官は自らの職務成績向上の材料となる郷数の増加を中央に報告せねばならない、類聚三、代格所收入政官符類に見える郷数、戸数等は正確をきめて是り、郷数が郡司配置の資料となりとやかく言われていることが知られる。オ二の理由として全じ特殊郷報を受け郷名の末尾に記載されている郷数、神戸等は余戸の分府地域外にも存すること。即ち伊賀、遠江、駿河、上野、因幡、伯耆、出雲、備前、備中、備後、安芸、長門、土佐等がそれであり、全じ特殊郷を記載する際、余戸のみを添すことも考えられず、余戸の分府も調査の上記入したと考へられる。以上二点が私見の根拠であるが、この際西海道に付いては、前述の如き理由により迄を於かず除外する。かく考え来ると、この場合、本資料を信じ、むしろ余戸のない国郡の存する事に

問題を置く方が妥当ではなかろうか、又このことは大スロウク説の基盤ともなる。

さて和名抄中には余戸の外、まだ郷の分割されたことを示す資料が存する。それは郷名中に「上」「下」の文字を含むものを、かゝる郷が分割の結果与へられた地名であることは推測に難くなく資料的に見ても極度凡士記の上巻、下巻両里の説明に

「後分爲二分」 (下巻)

と見え、凡士記成立以前にかゝる分割法が存したことが知られる、戸口の増加せる郷を二分し道路を基準とし京に近い方を上、他を下、或ひは川を上とし反対を下とするが如き分割法は、余戸などを作成するよりもより自然的であり、和名抄中に郷名として多く見られ、又国名、郡名から大化前代にその存在を窺ふことが出来る。

かゝる郷名を和名抄より求め、分類を行うと、(表1参照)幾内を中心とする地域、東国地方の二地方に特に濃厚に存在することが知られる。

こゝは前述の余戸の分布地帯と一致し、結局かゝる地方に分割がより多く行われたこととなり、上下一分割法の存在は余戸スロツク説明の証拠となる。しからば兩地帯は一体いかなる意義を有するものであるか。

オード人口の増加が著明なよう、このことは然内に於ける奈良時代の口分田不足その他多くの事実より知り得、東國地方に付いては植民政策、開拓の進行等によると考えられる。

オニの理由として考えられることは此地帯がより強く律令制を施行し施行し続けられねばならなかつたこと、畿内に於ては大和朝廷以後政府の根拠地であり、東國は大和朝廷の開拓地帯であること云う事矣。大化改新後他國に先立ち兩地帯に國司を派遣して居ること、は政府の熱意、異常なる關心を示すものであり以後、地方政治の關心の矢われに時代に於てもこの地帯には注意の目を向け、令制が施行されたのではなからうか、このことは更に次の項とも関連し注目すべきであらう。

オミには、東國地方に付いてある、奈良時代

を通じて、東國は常に蝦夷に對する防禦地帯であり、蝦夷征伐に當つては、二れ等地方即ち坂東八國、越等は兵馬、兵糧の補給地となつてゐる、かゝる任務を果す爲には人民の動靜をつぶさに知りかつ郷の戸数等の調査を要する必要がある、かくして余戸を多数生じたと解し得る。

オ四に、村落内部の收斂から説明が与う得る。

此等の地帯は特に分割、爲しやうい收斂にあつたのではないが、面スロツク共歸化人が古くより配置されて居り、爲に血縁的共同体のゆるみが早く行われ、其の爲めに古来の自然村落を加味しつつ、収つた郷の分割が爲しやすかつたと考えられる、又歸化人の保有せる文化へ特に新来の歸化人についていえることが、それを施行しやすかつたものではなからうか、こゝで問題となるものは歸化人と余戸の關係である。歸化人の任んだ里を余戸とする説について古くから主張がある。しかし余戸には歸化人の任んでいた形跡が存し前掲越前國司解に見える余戸郷の戸主には歸化人らしいものを含んで居る、又歸化人の居住地と余戸等の分布地の

の一敷することゝ一つの理由となる。

しかしこれらの資料を以て余戸の特殊性を論ずることは、いはば困難である。出雲国四余戸は他郷分割によつたであらうことが同国凡士記の記述より知られ又地理的にも郡家の近くに存し郡家の一部を分割したことが知られる。又山代伊美吉の動議をみても余戸が他郷と代りなく誰でも居住出来ることが知られる。かゝる点より余戸を帯化入のみの住地と決定するのは早すぎはしないだろう。

かゝる理由より両地方には特に後各逆郷の分割が続けられたものと考へられる。和名抄百余戸所の余戸郷がかゝる二地域に偏在する事の意義はかゝる所にあると云えよう。

へ註

(1) 畿内ブロッグII 山背犬和紀用和泉河内摂津丹

波丹後但馬播磨阿波若狹。

(2) 東国ブロッグII (関東東北をさす) 出羽陸奥

坂東八国

(3) 郡司事條

(4) 若干の例外が存する。山城國宇治郡の場合、八郷中五位に記載されている。

(5) 上倉 下倉 上島 下島 桑上 桑下

(6) 播磨凡士記質毛郡條

(7) 上毛野國 下毛野國等は國室名として古くより知られる。同様は例は上、下海上郡がある。

(8) 日本書紀大化元年八月條

(五)

前項で問題とした如く、古代に於ては郷の分割法として「余戸」の外に「上」下により分つ方法(上、下法と略す)が存していたことを注意せねばならない。そして両者共奈良時代初期に存したことは推測に難くない。即ち余戸の上限が養老迄遡り得、一方上、下法については直接郷に関する例がないが、兩郡が奈良初期迄上、下法によつて分割されて居り郷の場合も同様と推測し得、かゝる点から奈良時代両者共存したことが知り得る。所で両分割派の性格は全く異つて居り、余戸の場合は律令制下に於ける非自治村落性格を有し、入身的なものであるに反し、上、下法は自

然村落を生かしたものと云えよう。而ら此の相
異なる性格の分割法は以て後長く共存しつづけたであ
ろうか、否、いずれか一方が他方に先行し、前代
の名残りとして奈良時代に伝わったものと考えら
れる。結論から先に述べるならば上下法が余戸に
先立つものである。

かゝる結論に対する論拠を挙げるならば、まず
オ一に上下法の自然的性格、これに対し余戸は明
らかに令割により生じたもので、律令という基盤
なしでは成立し得ないこと。オニに資料面より云
うのであるが余戸の存在年代が現在の所養毛初年
を上限として居ること、上下法前項(註)で指摘し
た如く令割以前から国造名中に見え、かゝる分割
法が古くより存することから知られる。一方前法の
下限について見るならば余戸の場合は平安中期迄
存続するに對し、上下法は前述の如く郷につい
ての分割年代を知る得る資料はないが、国郡につ
いて分割の下限を求めるならば、表Ⅱの如くなり
大体奈良前半を以て下限として居り、それ以後の
年代にあつては、上下を附する例はなく、むしろか

表Ⅱ 「上下法」による国郡分割の成立年代

国名	郡名	分割年代	註
大和	添上下	和銅元以前	統紀、元明天皇和銅元年條
〃	葛上下	和銅元年以前	葛下郡がこの頃見えている(弘福寺領田畠流記)
〃	城上下	日本紀成立以前	烈王年記11月條に城との文字が見える少くとも書紀頃には分割して いたとある
攝津	島上下	天平5年9月以前	東寺教碑帳により島上郡・存在を知ることが出来る
遠江	長上下	和銅元年	統紀
相模	足上下	聖武元年3月以前	
上総	海上下	文化以前	国造名として知られる
備前中	上上下下	?	?
筑前	上上下下	持統天皇以前	持統紀に上陽群郡
筑後	上上下下	大宰2年以前	上三毛の郡として見ゆ(大宝又西海道戸籍)
上下野	—	書紀以前	国造本紀によると推古天皇朝に分離したことが記されていることは於け が、古いことは確実
上下總	—	〃	書紀東行紀々の王に上總が見えるが、書紀成化当時の 概念による

東西の文字を付した類似例が二例あるのみで大方はその中心地の地名、その他を付して居る。おそらく國郡好字を付する法、⁽³⁾國郡名を二字にする法令の爲、かゝる風は止んだものと考えられる。かゝる風潮は國郡のみに止らず、郷名に於ても見られたのではないだろうか？

第三に法令の面から考へるならば、まず戸令篇

凡戶以五十戶爲里每里置長一人掌檢校戶口課

殖農桑。蠶桑非盡。權黷賦役。若山谷阻險。地遠人稀。

之處脂便量置

と見え、何等分割問題を規定してゐない。しかるに養老以懷これが解釈に當つては種々の説を生じて居り、令集解に見える諸説を大別するならば大方次の二通りに分つことが出来る、

(4) 六十戸の場合、五十戸と十戸

(b) 三十坪の邸二つ作る

大室令の註釈書たる古記は(甲)を主張、釈引田の所説は(乙)を否定し、(丙)を主張して居る。この嚴古記の主張は当時施行中であつた大室令註釈書として

の令書の註釋を考へ合はせると、公説を單なる空文とばかりは考へ難い。せしる古記は大室令當時の分割法を頭に入れて解釈したのてはなからうか、もちろん古記の成立した天平中期には余戸は数多く存して居り、「上上法」より「余戸」への祖渡的年代であつたと解せられる、しからは余戸は法則にいい頃成立したてあるうか、唐令を見るに、開元二十五年令に於て分割問題が見えて居り、多分それ以前より何らかの形で存したものと推定される、かゝる法令は、戸数増加、その他の理由で里の分割問題が生じて居る我國に輸入され、余戸と成つたのてなからうか、余戸の資料が養料が養老を上限とすることは、二の年代に近い限應より輸入されたことを物語る。養老令は大室令の字句矛盾の修正に止つたため、新分割法記載されて居らず、以後法的解釈に當り種々の解釈を生んだのであらう。平安初に養解に分割法が規定せられ、余戸の法が正式に採用されたことはもちろん唐の開元令の影響によるものと解せられる。

以上三案より論考を述べたわけであるが、今日

では人口の増加は奈良時代におきてのものでなく、それ以前から問題化されていたと考へられ、かくの如き情勢からすると、奈良時代以前にも郡の分割問題があつてもさしつかえ無く、むしろ當を得たものと云えよう。上下法と余戸との関係は、かゝるものである。

〔註〕

(1) 外に余戸と云ふ、上下とも違ふ、單なる地名を付した命名法も存したであらう。

(2) 菟津国東成、西成両郡

阿波国名東、名西両郡

(3) 和銅六年菟布

(4) 郡名ニ字化は全国一斉でなく、國毎に天平頃迄に施行せられたと考へられる。

(5) 戸令集解為里條

古記云、若六十戸者為二分、各以卅戸為里也。

(6) 戸令集解為里條

釈云、卅云若滿六十戸者割十戸立一里置長

一人。

(7) 南元廿五年令戸令（唐令拾遺）

へ郡略、其村滿百家置置一人、兼同

坊主、其村居如不滿十家者、隸入大村、

不得別置村正

(8) 戸令集解為里條

謂若六十戸者割十家立一里、置長一

人、其不滿十戸者隸入大村、不得別置也

(六)

以上五項目に分つて述べ来つた処を要約すると、奈良・平安兩時代に於ける余戸は、それ以前より存した我國固有の分割法、即ち郷を上、下に分つ方法と共に、戸数増加に伴う郷の分置に際して生じたもので、奈良中期以後には律令制度の強化、その他の理由より余戸のみ設置せられる所となり、その最後の様相は和名抄にうつされてゐる。そして和名抄での分置は二大ブロックがあり、それらがいづれも大和朝廷以来の地盤である事に看過すべからざる問題点を指摘し得ると想うのである。

以上をもつて本編を終る次第であるが、時に後半部は目下繼續研究中であり、不満足は多し、諸家の御批判御教示をたいへん希望する。